裸蟲（はだかむし）

今東光

裸（はだかむし）蟲

昭和四十二年十一月二十日　印刷
昭和四十二年十一月二十五日　発行

定価三三〇円

著者　今東光
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)一一一一(大代)
振替東京八〇八番

乱丁・落丁のものはお取替えいたします

印刷・図書印刷株式会社　製本・大進堂製本所
© TOKO. KON, 1967, Japan

目次

裸蟲……六
仏心……一三
野井戸……一五
毛蟹……一八
線香護摩……二三

裴 幀

渡 辺 禎 雄

裸

蟲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

裸

蟲

昭和四十二年三月十五日付の大阪発行の各新聞紙に、七八段抜きの派手な記事が社会面をにぎわせた。

こんな問題、というのは一地方の相撲興行に関する記事なので相撲に興味のない読者は一瞥したきりで見過して仕舞ったかもしれないが、多少とも相撲に関心を持ち、あるいは角狂ともよばれる人達にとっては可成り重要な記事だったのではあるまいか。

相撲となれば東京、名古屋、大阪、博多の相撲協会によるそれぞれの本場所。すなわち本職の力士による相撲だけがテレビなどに登場して一般に場所で見物しない観客をも相撲通にしたが、素人相撲などは草競馬より他愛のないものと思惟するのが一般の傾向だろうと思う。都会の何所かの空地で下手くそな野球を熱心に見ているのは酒屋の御用聞きとか、クリーニング屋の配達人とかで、まともな大人は気にかけない。それより逸球でも飛んできて眼鏡にでもあたったら、それこそ大変だと思うくらい。田舎の神社の境内などの夜相撲というと村の力自慢がやるぐらいを素人相撲と心得ている。従ってそんな素人相撲の問題が、どうして大新聞が社会面で大袈裟に扱ったのかと、その方が問題のように思った人があったらしい。

これは大阪の衛星都市の一つ。映画や芝居やテレビに出るようになって、とみに名を知られ

てきた河内八尾市の事件だ。一応、新聞の切抜きを掲げる。

花相撲に物言い
暴力団に資金　議員は売名？（警察が申入れ）
番付に名ずらり
八尾市営球場を予約
（八尾）

暴力団が関係する相撲興行に、八尾市教委が八尾市営山本球場を貸そうとし、八尾市も入場券配布にもひと役買っていたことがわかり、八尾署は十四日「暴力団の資金源となるような興行に、公共施設の貸与はやめてほしい」と、強く同市教委に申入れた。すでに入場券の大半が出回り、興行の準備も進んでいるので、市教委は、緊急教育委員会を開くなど対策に悩んでいる。同市では、さる三十九年夏にも、暴力団がからむ盆踊りに市立小学校の校庭を貸して問題になったことがある。

この相撲興行は、東大阪、八尾の両市など東大阪一帯の素人相撲の民間組織「中組相撲協会」（A組長）が主催し、大阪での春場所終了後に大鵬、柏戸、佐田の山などの力士と役員ら、総勢三百五十人を招いて花やかな「顔見世興行」を披露してもらおうという計画。収益の一部は老人ホームなどの施設へも廻すというふれこみで、去年十一月、仲介役の同市相撲協会会長のK市議が球場借用を担当の同市教委社会教育課に口頭で申入れた。

同課は何の疑念もはさまずに球場使用を内諾、さらに今年二月中旬、同市議とA組長が再び

協力を頼みに来たときも、正式文書による「使用許可」申請もとらずに、桟敷の設営、雨天順延の期間も含め、三月二十九日から四月五日まで球場をあけることにした。

主催者の中組は、これで市が正式に球場の使用許可をしたとみて、大人八百円、小人四百円の入場券約五千枚の検印を八尾税務署ですませ、同組の親方たちを通じて大半を売りさばいた。このうち約二百五十枚は、市の民生部を通じて十日ほど前、八尾老人ホームなどに無料で配付されている。

不用意に口約束　市教委

ところが八尾署が、半月ほど前から市内の有力者にくばられた番付表を調べたところ、脅迫容疑で先に同署が逮捕した暴力団T組長、八尾市防犯委員T（保釈中）をはじめ、暴力団数名が「頭取」「世話人」として名を連ねていることがわかった。また相撲の「取締」として興行の実質的な主催者になっているA組長も、Tと同様、東大阪一帯に根をはる倭奈良系の暴力団A組の組長とわかり、大阪府警捜査四課と連絡をとった結果「公共施設を市教委が貸すのは非常識で好ましくない」として、さる八日、口頭で、十四日には正式文書で市教委に申入れた。このほか番付表には、有力な府議や市議数人が「世話人」として暴力団と肩を並べており、この点についても八尾署は「地方選挙をひかえて売名に利用されるおそれもあり、不明朗だ」と批判的だ。

十三日には緊急教育委員会を開いて正式に使用許可を出すかどうかを検討した結果「いままでのは正式な使用許可ではない。暴力団がからんでいるのなら一応不許可としたい」との意向

を固めた。しかし、たとえ「口約束」でも不用意にいったん許可し、興行準備が進んでいる以上、無条件で断われず、善後策に苦しんでいるのが実情。「プロレスや相撲、芸能関係の催しには、当然はじめから、疑問をもってかかるべきではなかったか」と、部内でも批判の声が出ている。

以上の記事は各紙の代表的な報道だ。それにA組の組長談、教育長の談、八尾署長の談などがつけ加えられて大々的に紙面を飾っているのだ。

朝吉どんは朝飯の前にざっと目を通す習慣から、番茶を淹(じ)れさせてぐっと一口呑み、ぱらぱらと新しい印刷インクの匂いのする新聞をめくって社会面のこの記事が眼に痛いほど飛び込んだ。

「あっ。やられたな……」

それを書いた市役所の記者クラブにとぐろを巻いている記者の顔までありありと浮んで来た。

（こうなるのが解っとるのに――）

と思うと今度の世話人の一人々々が皆癪(しゃく)に障(さわ)った。

肉親の兄が死んで相撲部屋の跡目をと請われた時、もともと土建業を止めて今の刷子(ブラシ)製造に転業すると共に兄の跡目も断わったのだ。兄は若い時から力量があり父の農業を扶けていた頃、一度に重い荷を担いだために何度も天秤棒(てんびんぼう)を折って叱られたものだ。その兄が中河内郡で切っての立派な部屋を創設しただけに、自分が肉親の兄をカサに着て部屋の跡目を相続し親方

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

になるのが憚られた。朝吉の友達等は、
「われ。そないな遠慮いらんやないけ」
と切々とすすめられても、この照れ臭さがりの朝吉はどうしても聴き容れなかったのだ。兄は亡父の晩年、百姓をしているのは知恵がないと言って、まだ河内八尾で誰も刷子をやっていない時に自宅で刷子製造の一貫作業をやりだした。幸いに神戸の居留地で商館を開いていたアメリカ人の信用を博し、輸出物が面白いほど出たのだ。
尤も、この輸出物は現在でも第一級の品物と言えるだろう。何しろ植えた毛は支那の重慶産の最高級の豚毛を精製したもので、そのハンドルは黒檀や紫檀や紅木に精緻な彫刻をほどこしたのだから外国人好みにぴったりだった。イギリスあたりの衣裳道楽の紳士は、洋服一着に一本のブラッシという風に、着地に合わせて粗密双方のブラッシを備えるものだから羽根が生えたように売れるのだ。今日では中共のために支那産豚毛の輸入は途絶え、東南アジアからは紫檀も黒檀も入らないので、プラスチックのハンドルにニャイロン（ナイロン）の毛を植える始末だ。
兄は、たちまちに工場を拡張し、大勢の男女を使い、金を湯水のように遣っても一夜明くればまた札束の雨が降ってくるという景気。その金を自分の相撲部屋に注ぎ込み、
「相撲でも取らしとったら若い者は堕落せん。銭が入って暇があったら碌なことさらしよれへん」
舎弟の朝吉をはじめ職人達に相撲をとらせた。相撲さえとっていれば夜更しをしようと文句

は言わなかったのだ。

今でも年輩の人は「旭鶴」という四股名を覚えている筈だ。北、中、南の河内三郡の五人抜き相撲に優勝し、賞品として出された米一俵を、まるで枕でも持つように両手で軽々と捧げて土俵を下がった時に、

「旭鶴……旭鶴……」

という呼び声が八尾の土俵場で爆発したということだ。あまり強いので大阪の本職の朝日山部屋の親方が貰いに来たところ、盛大な刷子工場を経営しているのを見て、

「こんな人物を相撲にはでけんよ」

と匙を投げたというのも一つの物語で、彼は後に八尾町長にもなったのである。

こういう閲歴の兄の跡目は、本来ならその伜が継承すべきだが、長男は東京の大学に遊学したので相撲には関心が薄かった。

今では親戚のK市議が相撲協会の協会長になっているのも、朝吉どんの推挙で彼は飽くまでも世間的には顔を出さなかったのだ。

それでも布施の組が主催して大相撲を興行したりすると、二十六人の親分衆が紋付羽織袴で土俵の上から挨拶するのに、一匹狼の朝吉どんは矢張りその中に入れられるのだった。親分も無くまた乾分も持たない彼は、白無垢鉄火で通っていた。数から言えばそれほど微力なのに二十五人の親分衆は彼を一緒に並べないと幕が開かないことを知っているのだ。それほど貫禄があるのに彼は世話役は買って出ても、兄の跡目を継がなかったのは天晴れだった。

昔、相撲をとった仲間がそれぞれ部屋を持ったりしても、彼は羨ましがるどころか寧ろ彼等の浅慮を気遣い、

「今のような部屋制度では衰えるばかり。大体、東京の相撲協会の悪い点ばっかり模倣してるさかいあきまへん。彼奴等も今に鼻を打ちまっせ」

と、せせら笑っていたのだ。

今度の花相撲は、どうした訳か朝吉どんに相談があったのは一番後で、既に内談は決って入場券さえ印刷済みと聞いて少々むかっ腹を立てた。

「相談やないやないけ」

「それがな。皆忙しゅうて……」

「俺だけ遊んどるちゅうんか。わいかて忙しいのじゃ。われと話してる間ァも惜しい」

「そない言うてくれるな」

「相談やのうて報告ですと言え。阿呆」

鉄ちゃんと呼ばれる半白の親父も朝吉どんの前では膝も崩せない。

「わいら銭無しが、よう入場券の印刷費出せたの。何所から銭出たんや」

「実はな」

と耳うちしたのは相撲協会会長のK市議の懐ろから五十万円出たと打ちあけた。

「阿呆ッ」

と朝吉どんは怒鳴りつけた。

あまりの見幕に鉄ちゃんはすたこら辞去した。

（彼奴等のおだてに乗って銭出しよったが、五十万円分の入場券を渡して立替えを帳消しにする算段や。それが読めんのか彼奴は。その切符一枚でもバラ撒いたら、たちまち選挙違反になるのがわからんか――）

と思うと、どっちにも腹が煮えくりかえるほど腹が立った。

朝吉どんの耳に中河内の十六組、南河内の十三組と言われた部屋の親方連が寄り合って、東京の大相撲を招くらしいという噂が入ったのは中組でも一番の大部屋と言われた大井川部屋の若い者の一人、植木職の辰という男が天台院の木作りに来ていた時、ぺろりと口を滑らせたので耳に留めていた。

「よオ。辰。木作りか」

築地塀に沿うて歩いていると辰の姿が木の上に見えたので声をかけた。

「へえ。この頃、蓑虫が殖えよって木枯らしよりまんにや。お住ッさんが目ェ剝いて早う来い言わはったんで」

「大井川部屋は檀家さんやから手ェ抜かんとやれよ」

「へえ。親分に言われんかて心得てま」

「親方はよ」

「目白刺しに毎日、生駒山に行てたんでっけど、今朝は早うに寄合いあるて」

「何の寄合いでえ」

「きまってまっしゃないか。東京相撲呼んで花相撲やるんやおまへんか」
「へえ。そんな計画あるのか」
「大阪場所が千秋楽になったら、一日、八尾でやって貰うて噂だっせ。大鵬と柏戸の両横綱が来たら大入り間違いなしや」
聞いているうちに不愉快になった。誰も自分には一言も洩らさないのだ。恐らく自分に反対されると思ったからに違いない。事実、反対するだろう。というのは現在の中組一統では経済的に大相撲を呼べるほど力はない筈だ。それほど各部屋は衰退して来たのだ。
天台院の墓地の一角に立派な御影石の墓が一基建っているが、これには大井川某と刻んである。これは六カ村の素人相撲が身体をあずけている大井川部屋の親方の墓だが、遺族が建てないで部屋の相撲等が親方のために建てたものなのだ。ところが他の部屋の親方で死亡した者が可成りあるのに、その部屋が衰退しているので御恩返しが出来ないのだ。哀しいことだけれども現実はそうなのである。
朝吉の兄も若い頃、相撲を頻りにとったが、大井川部屋に属していた。中野村は大井川部屋に属することになっていたからだ。旭鶴が力量を発揮しだすと大井川部屋で歯が立つ者がなく、次第に稽古も旭鶴にして貰う関係から彼の勢力が増大してきた。大井川部屋の親方は気の好い人なので、
「なあ旭鶴。お前の向うに立つ者がないよって部屋を創設したらどや」
と親切にすすめて呉れた。旭鶴は二十五歳で町会議員に当選したから、自分の下風に立つと

は思えなくなったのだろう。けれども旭鶴は、

「わしは大井川部屋で相撲四十八手の手ほどきを受けましたんで」

と固辞して引受けない。しかしながら誰言うとなく大井川部屋のことを旭鶴部屋と呼ぶようになった。

まして八尾へ刷子工業を持ち込んで沢山の業者が生れ、自ら旭鶴の親方が組合長に推されるようになると、彼は派手な金を費ったので部屋へ飛び込んで来るのが多くなった。まったく隆隆たるものがあった。

河内では、相撲部屋の親方になると三年経ったら蔵の棟が落ちると言われたものだ。親方になるには蔵の所有者ぐらいの良え衆でなければ到底不可能だったが、それですら三年も経つか経たぬに破家亡身の憂き目を見るという謂だ。

朝吉どんは市議の知っている連中に、どんなことあっても一枚の入場券もバラ撒いたらえらい目に会うぞと注意してやった。彼等にも漸く危険が解った。頭の鈍な市議連も、

「彼奴等えらい目に会わすとこやったな」

部屋の親方らも時代がくだると悪知恵を働かせるらしい。二百万円の仕込み代はこんな風にして集められた。つまり馬鹿な市議が五十万円、三十万円、十万円と騙り取られたような結果だ。

「お住ッさん。居*んなはるか」

陽炎の燃えるような暖かい日ざしだ。和尚は足の爪を切っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com